

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 江馬務の歳事史研究と京都の祭礼： 歴史を可視像化した有職故実家

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新木, 直安 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002017">https://doi.org/10.57529/00002017</a>

# 江馬務の歳事史研究と京都の祭礼

## ―歴史を可視像化した有職故実家―

新木直安

### 要旨

有職故実家であり、風俗史家として知られる江馬務は、祭礼や年中行事に関する研究者でもあった。江馬は、歴史学や民俗学の枠を超え、朝廷の祭祀・行事だけでなく、武家や社寺、そして、民間の年中行事に至るまで、全てを「歳事」という言葉で表現した。また、歴史的にも上古から現在に至るまで幅広い「歳事史」研究を続けた人物である。では、江馬は、「歳事」というものをどのように捉えていたのか、また、江馬は、「歳事」が人々にもたらすものについてどのように考えていたのかを調べた。この点に加え、「歳事史」や「有職故実」の専門家である江馬務は、生まれ育った京都の祭礼に深く関与した人物でもあった。特に、人々が注目する祭礼・祭事に関与している。江馬務が深く関与した歳事を具体的に調べ、京都府立総合資料館所蔵・京都文化博物館管理の江馬務コレクションにある資料の翻刻などを行った。江馬務が歳事を通して見たものは何かを考察した。

### キーワード

江馬務、歳事史、歳事の種類と構成、有職故実、京都の祭礼、賀茂祭

### 一、はじめに

平成一九年度文部科学省オープンリサーチセンター整備事業選定「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業に於いて、第二グループ「神社祭礼に見るモノと心」と題して、神社祭礼に関わる「モノ」について調査・研究を続けている。神社祭礼の主たる齋場となる本殿や拝殿などの祭祀施設である社殿や、境内地周辺を練り歩く「ダシ」などに着目しているが、これらの「モノ」を見る際に、一つのフィルターを通して見る必要があると考えている。それは「有職故実」である。様々な祭礼や儀式を調査・研究している上で、ある一定の法則のようなものが根底にあるのではないかと考察する。その根底にあるものが、「有職故実」に基づいた考えではないかと思う。「有職故実」と聞けばすぐに装束や衣装、色目などに行きがちではあるが、祭礼や儀式の作法、しきたり、禁忌などはすべて「有職故実」から派生しているといっても

過言ではない。ほとんどの「有職故実」に関わる事項は、経験上の人生哲学を文言化、法令化したものと言ってよいと考える。祭礼や儀式をスムーズに円滑に進めると同時に、祭礼・儀式を齋行する組織、所謂、祭祀組織の構成を加味し、上下の構成や各所役の役割を明確化したものが「有職故実」であると思う。ただ、祭礼を継承するのではなく、継承する意味・意義が込められている一つの袋のように思える。その袋にある「有職故実」という手段から、祭礼の歴史的展開、儀礼作法、装束・衣装、御神室や武具類、また祭祀施設の修造に関わるモノや神幸祭の行列に於ける「ダシ」と呼ばれるモノの意義などが理解出来るのではと考えている。その「有職故実」を追い求めた人物達の考え方を見ていくとやはり「モノと心」という点に於いて、様々な分野の力を借りながら考察している。私たちの第二グループが現在調査・研究している先駆者たちと言っても過言ではない。そこで、有職故実家と呼ばれる人物たちは祭礼の中で用いられる「モノ」に何を見出そうとしているのかに

ついで考察した。

有職故実家の中でもあらゆる分野を研究している先人がいる。宮中祭祀でも天皇家や院家、官家から堂上家、地下人などがある。武家でも鎌倉期、南北朝期や足利義満以降の室町期に、幕藩体制が整った江戸期などの時代別による研究などがある。また、民間に於ける有職故実について研究している先人たちもいる。その中で、これらを全分野にわたって研究した人物がいる。それが江馬務である。

江馬は、天皇家から民衆に至るまで、古墳時代から現代社会に至るまで、大変幅広い研究を行っている。中心となるのは、江馬の代名詞的な言葉にもなった「風俗史」に伴う、装束・衣装が中心であるが、それだけには留まらず、祭祀そのものにも言及している。江馬が行った研究を見ていくと包括的な研究に見えるが、実は細分化し、分類を行いながら研究している事が、論考などで見受けられる。今回は特に、江馬の代表的研究分野の「風俗史」と双壁をなす「歳事史」に着目したい。江馬は「有職故実」に基づいた視点から祭祀・行事を分析している。そして、江馬自身が祭祀というものをどのように捉えたのか。また何を見出そうとしていたのかを見ていきたいと思う。また、江馬が行った祭祀の調査方法や、実際に祭祀の参考文献として用いた古文書などを通して江馬の「モノ」に対する視点について考えていきたい。

なお、本稿は、本事業に於いて、平成二二(二〇一〇)年三月六日〜十日に、「福井県・京都府祭祀資料収集調査」を行った調査報告も兼ねたものである。<sup>1)</sup>

## 二、江馬務について

江馬務(明治一七(一八八四)年〜昭和五四(一九七九)年)は、京都市下京区富小路松原上ルにて生まれた。祖父の天江(文政八(一八二五)年〜明治三四(一九〇一)年)は、和歌や国学に通じ、名医であった緒方洪庵か

ら蘭医学を学んだ人物であった。また、明治新政府が一般から募集した行政官吏官を務め、一世一元明治改元の詔勅の起草や、明治天皇の即位式の下準備にも関わり、参列している。その後は、医師として生計を立てながら和歌の研究を続けていた。父の章太郎(安政五(一八五八)年〜大正一二(一九二三年)も医師として京都の医学界を牽引した人物であった。医業以外では漢詩や漢学、和歌を嗜んだという。祖父と父の共通した点は、生計を無視する程の書籍の蒐集家であり、古文書から最新の小説まで読破するという読書狂の家系であったようである。祖父や父が蒐集した文書を幼い頃から読み続け、後に「江馬史学」と呼ばれるまでになった江馬務の歴史観・有職故実・風俗史・歳事史などの基礎知識を養っていったと考えられる。<sup>2)</sup>

江馬は、明治四〇(一九〇七)年に、京都帝国大学史学科に入学。明治四三(一九一〇)年には、京都帝国大学大学院に進み、明治四四(一九一一)に京都市立美術工芸学校講師に、翌年の明治四五(一九一二)年には、京都市立絵画専門学校講師となり教鞭をとっていた。<sup>3)</sup> 京都帝国大学の同期生には、西田直二郎<sup>4)</sup>などがいた。また、江馬は山科言繩に宮中の有職故実を学び、<sup>5)</sup> 猪熊浅磨(浅麻呂とも)や関保之助からは公武の故実を学んだ。<sup>6)</sup> そして、江馬に多大なる影響を与えた林森太郎の指導の下、<sup>7)</sup> 明治四四年に風俗研究会例会を発足させた。

初期のメンバーには、森太郎のほか、猪飼嘯谷、若原史明、井上頼寿、吉川観方(大正三(一九一四)年から)<sup>8)</sup>などがいた。この風俗研究会例会は風俗研究会に発展し、大正五(一九一六)年から日本の風俗史研究だけでなく、年中行事の研究から考古学、民俗学、歴史学、政治学、宗教学など様々な学問に影響を与えた『風俗研究』が発刊されるようになった。<sup>9)</sup> これ以降、江馬の存在は京都の研究者の中心的存在となっていく。昭和七(一九三二)年には、様々な学識研究者が集まり、土俗について研究をする為に作られた「土俗同致会」が創立される。メンバーには、江馬以外には、藪田嘉一郎、今井啓一、井上頼寿、久世正富、藪重孝、草葉孝次、重森三玲などであった。機

関紙として、『怒佐布玖呂』を刊行した<sup>⑩</sup>。活動期間は一年程度であるが、今日に至る「京都学」の基礎を作った研究会であった。その後、昭和一三（一九三八）年八月に行われた「京都史蹟座談会」には風俗研究会を代表して江馬が出席、司会者の明石染人、杉浦丘園、井上頼寿、田中緑紅、石井琴水、重森三玲、川勝政太郎が参加した。余談ではあるが、江馬は、あと粟野秀穂と若原史明が居れば全ての大家が揃うと述べている<sup>⑪</sup>。出席者を見ると、大半の参加者はこの時期、在野で活動していた時期であるが、自由奔放に粹にとらわれずに資料収集・調査・研究をしていた頃である。事実、現在分かっている段階で江馬が生涯書いた論文や随筆は、八〇〇本を超すと見られているが、その大半が『風俗研究』を始めとする戦前・戦中に刊行されていた機関紙や学術雑誌に投稿されたものばかりである。

しかし、戦争に突入し、敗戦を迎え、江馬をはじめとした研究家たちは、価値観の変化や、生活環境全体の変化を感じるようになる。戦後直後刊行された江馬の著作を見ると、「歳事」について、このような文言が見える。例えば、昭和二四（一九四九）年に刊行された『日本歳事全史』の「結語」には、

「各舊官幣社でも、国家の保護のない以上、今後は年中行事縮小の止むなきに至ると共に、年中行事によりて収入を計るの道が講ぜられようし、寺院に於いても基督教の進出により、多少の變動は免れないであろう。民間に於いても食料品に制限を加えられた點で、廃止の已むなきものも多数を算すること疑ひもなく、舊行事の消滅に歸するものも多かるう。況してや、今後の日本科學思想が普及して、年中行事自體が脅威を蒙ること疑いなく、今後は追々思想の上から自然淘汰を蒙り、結局合理的な新意識の下に完全なもののみが統一されてゆくであろう。」

と述べている。各研究者も何らかの機関に属するようになり、戦後の一種の危機感を感じながら、後進の指導を中心に研究を進めていくようになる。江馬の著作を見ていくと、戦中・戦後までは、「歳事史」関連の作品が中

心に、世に出されているが、昭和三〇年代から晩年は、装束・衣装を中心とした「風俗史」に戻っている。江馬の講義や演習は、江馬所蔵の実物の装束を使い、モデルに着用してもらった姿を写生するというスタイルで行っていたという。この実物の「モノ」を使用するスタイルで日本史について教鞭をとっていた為に、戦後改めて、影響を強く受けた人物たちが登場する。例えば、中村直勝や柴田實、林屋辰三郎そして井筒雅風などがある<sup>⑫</sup>。所謂、京都学派の影響を受けた研究者たちと重なる点に注目出来る。また、戦後、東京側の有職故実家たちに働きかけ、昭和二八（一九五三）年一月には、「有職故実研究会」を設立。同年一月一七日には神社本庁に於いて創立総会が行われるなど戦後の不安を払拭するかのよう活動した<sup>⑬</sup>。実際には、次の世代への継承という理念・理想もあったものと考えられる。そして、昭和三五（一九六〇）年一〇月に國學院大學に於いて、日本風俗史学会発起人会が行われ会長に推された。同年一月には、東京国立博物館大講堂に於いて、「日本風俗史学会発会式」が挙行された。江馬は、晩年まで講演会などで「風俗史」について語り続けた。

一方、「歳事史」に関する研究は、昭和初期から戦後直後の期間で行われていた。この歳事史研究の期間は、祭礼そのものと深い関わりのある期間でもあった。それは、京都に於ける祭礼の再興に携わっているのである。特に大正・昭和の大典と神宮の式年遷宮前後に、京都の社寺が本来あるべき年中行事を再興したいとの願望に応え、江馬の監修の下、再興、再現がなされている。これらの祭礼を再興する為に用いた知識が「有職故実」であった。この有職故実の考えの下で、「祭礼とは何か」という考察を重ねて、祭礼の実現化を行った。この事について、梅棹忠夫は江馬が成し遂げた仕事について、「歴史の可視像化」と評している<sup>⑭</sup>。

実際、江馬は、祖父・父が残し、自身が蒐集した「古き書ども」の声を聞き、これをもとにした歴史観に、有職故実を用いて、さらに江馬が居た時代の枠に当てはめながら、実証する歴史学を築き上げた事は有名である。その

点に注目をし、江馬自身が祭礼の再興や継承にあたる上で、何を重要視していたかを見ていきたい。<sup>17)</sup>

### 三、江馬務の歳事史研究

江馬の「歳事」に関する論考で代表的なものに、「歳事の研究」<sup>18)</sup>と、「年中行事の調査法及びその研究法」<sup>19)</sup>とこれらの論をまとめあげた『日本歳事全史』<sup>20)</sup>がある。この両論から江馬の「歳事」に対する考えを見ていきたい。

まず、歳事を考える上で、「年中行事」でなく「歳事」としたのかという点を見ていくと、「年中行事」という言葉には、朝廷を中心とした組織での年間行事の事を指す呼び方である為、武家や社寺、民間も含めて大枠での表現の仕方として、「歳事」と言葉で表現していると述べている。例えば、齋藤月岑の『東都歳事記』(天保九(一八三八)年刊)のように、東都(江戸)での様々な階級の人々の年間行事を編纂したものであるから、「歳事」という言葉を使用しているのではと江馬は指摘している。なお、「歳事」は新しい言葉であると指摘しており、「歳事」は元々「歳時」と言っていた。この『東都歳事記』は、「歳事」の言葉を使用した文書では最初の方ではないかと述べている。

#### 1、歳事 の概念

まず、歳事について考える上で、歳事 の概念の種類を挙げている。

- 一、土地による区分：全国的と地方的
- 二、人による区分：1、国民的、2、社会的、3、法人的、4、同族的、5、一家の、6、一個人的

以上の様な区分をもって歳事 の分類が行えると考えている。ただし、江馬は、これらに加え、法制的・模倣的な方法によって緩急が付き、祭礼・行事に差が生じると述べている。また、これらに加えて「郷土色 (local color)」を

重視すべきと「歳事史」研究以外の論考でもしばしば触れている。なお、「郷土色」という概念を構成しているものには、「風土」、「気候」、「民族」、「性情」、「教養」、「徳義」、「信仰」、「経済」、「芸術」、「衣食住」、「儀礼」、「娯楽」、「交通」、そして「歳事」の要素が含まれていると指摘している。

#### 2、歳事 の系統

次に歳事 の系統を考える上では五つの系統があると指摘している。

- 一、宮中及び堂上家
- 二、幕府及び武家
- 三、神社及び社家
- 四、寺院及び僧侶
- 五、民間・民衆

以上のように五つの系統に分類出来る(図1参照)。

江馬曰く、「五系統」の相互作用に於いて、歳事 の伝播や継承が行われているとしている。江馬が挙げた例を見ていくと、

- ・〔宮中〕「齒固」↓〔武家〕：鎌倉期、幕府内でも行われている。
- ・〔武家〕「菖蒲湯」↓〔民間〕：江戸期に武家が五月五日の「尚武」に合わせて菖蒲湯に浸っていたが、民間にも伝播したという。実際には、中世末、

朝廷内でも女官たちが行っていたようである。

・〔宮中〕「曲水宴」・「菊宴」・「白馬神事」↓〔神社〕：各神社に於いて、斎行されているが、中には伝授されたものでなく、模倣された行事もあるので、

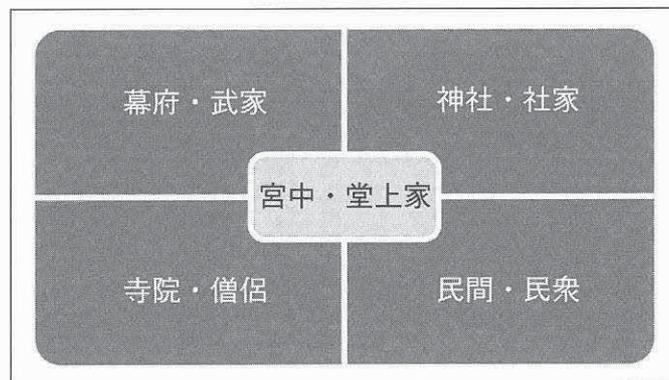


図1、歳事を構成する五系統の概念図

各神社での様子は詳細に検討する必要性がある。

・〔宮中〕「乞巧奠」↓〔武家〕・〔神社〕・〔寺院〕↓〔民間〕「七夕」などの様なものがある。この「五大系統」はすなわち、歳事の齋行組織の構成である。各組織が祭礼行事を伝授したり、享受したり、または模倣したりする事で、継承されていく様子を知る事が出来る。また、各組織に影響を与える事で変化を促す作用も持っている。例えば、「風流」という概念は、各組織で生まれるものである。それが、祭礼に用いられるモノに限らず、祭礼や行事そのものの意義を変化させる作用を持ち合わせている。一例として、近世期、民間から派生した「風流」の概念は、「ダシ」の形状の変化に影響を与え、「曳く・昇く・置く」の行為に込められた意義さえ変化させた歴史がある。<sup>(21)</sup>

### 3、歳事の背景

次に江馬は歳事の背景に関しては、このように分類している。まず、齋行される日時・季節に関する事と、これらに該当する祭礼行事として以下の様なものも挙げている。ただ、江馬が挙げている祭礼・行事は、旧暦での齋行日時や、齋行年代が近代以前のものが、大半であるので、現行祭祀での齋行日時ではない事を述べておく。なお、〔宮中〕などの組織の区分については、江馬の考えのもとに、派生したと思われる組織の名前を筆者が付け足した。

一、毎年月日を定めて行われるもの↓〔宮中〕正月元旦の四方拜、〔武家〕六月一六日の嘉祥、八月一日の八朔、〔民間〕七月一五日の盂蘭盆会の盆踊り、十一月の顔見世、〔寺院〕二月一日〜一四日修二月会、七月一六日の大文字、〔神社〕六月一六・一七日の厳島神社管絃祭など。

二、月は一定し干支を定めて行われるもの↓〔宮中〕正月上子日の小松引、正月上卯月の卯杖、三月上巳日の上巳祓、〔宮中・神社〕四月中酉日の賀茂祭、〔神社〕四月上辰日の八瀬祭、〔宮中〕一〇月亥日の亥子餅など。

三、月は一定し吉日を選んで行われるもの↓〔宮中〕正月の吉書奏、〔宮中・

寺院〕二月の臨時仁王会など

四、暦により自ら月日が一定するもの↓〔宮中・寺院〕彼岸、〔宮中〕節分など。

五、自然現象によつてその季節が定まるもの↓〔宮中・神社〕大神神社・狹井神社の鎮花祭、〔寺院〕千本大念仏など。<sup>(22)</sup> 他には四季遊観（花見、雪見行幸など）もこの部類に属する。

六、人事の都合によりその日程が定まるもの↓〔武家〕三十三間堂の大矢数など。<sup>(23)</sup>

七、隔年一定日に行われるもの↓〔武家・神社・民間〕江戸山王祭と神田祭と挙げている。あらゆる祭礼・行事、すなわち歳事の根底には、一定の法則があり、これらに基づいて行われている事を指摘している。

次に歳事の発生の動機については、以下のように分類している。

一、国政に関するもの↓〔宮中〕列見、擬階奏、着欽政、定考、御曆奏、〔武家〕評定始、沙汰始など。

二、神祇を敬祭し神慮を慰めんが為↓〔神社〕賀茂臨時祭など。

三、神仏に報謝せんが為↓〔宮中〕積奠、〔神社〕阿蘇祭、〔神社・寺院〕石清水臨時祭など。

四、神仏星辰に対し国家社会一門一家の除厄幸福を祈らんが為↓〔宮中〕四方拜、神今食、新嘗祭、〔神社〕鹿島神社天下泰平祭、賀茂祭、祇園会、〔寺院〕高雄法華会、京閻魔詣、浅草法華三昧法会、〔民間〕七福神、恵方詣、節分など。

五、ある行為により除厄幸福を祈らんが為↓〔宮中〕屠蘇、菌固、若水、七草、卯杖、白馬節会、七瀬御祓、大祓、追儺、〔武家〕宝船、桃花酒、菖蒲湯、嘉祥、亥子、豆打、〔民間〕門松、蓬菜、鏡餅、破魔矢、春駒大黒舞、太神楽、猿廻し、傀儡師、雑煮、左義長、菖蒲湯、六月祓、粽、豆撒きなど。

六、人倫の儀礼より↓〔宮中〕朝賀、〔武家〕年始御礼、〔民間〕年始御礼廻、お年玉、八朔、お歳暮など。

七、娯楽より↓〔宮中〕踏歌節会、曲水宴、雪見行幸、〔武家〕松囃、〔民間〕福引、かるた、花見、納涼、盆踊り、中秋観月、年忘れなど。

八、あることを宣伝せんが為↓〔武家・民間〕義士祭、〔民間〕メーデーなど。

九、技芸の上達を計り奨励せんが為↓〔宮中〕射禮、騎射、相撲会、〔武家〕乗馬始、具足餅、具足祭、〔民間〕書初め、三十三間堂大矢数など。

一〇、雑↓更衣、納涼など（持続的の事の始まりの日を指す）。

このように、祭礼・行事の発生の動機を挙げているが、内容としては、政治的・経済的・信仰的・芸能的な面での作用が働き、歳事が成立していくと考えていたようである。さらにこれに加えて、齋行される日がどのように選定されているかという点に注目して分類化している。

一、自然現象により日が一定するもの↓彼岸、七夕、観月など

二、日の性質が陰陽道その他により祥不祥あるより起こるもの↓端午、重陽など

三、卜占により定めし日が一定せしもの↓吉書奏、祈年穀奉幣、日待月待など

四、神、人の縁ある日に行うもの↓日吉祭、稲荷祭、日光祭など

五、ある歴史上より定まるもの↓小松引、卯杖など

六、人事の都合上、日の一定するもの↓各社の氏神祭など

七、偶然的事故から一定するもの↓大半の祭礼・行事はこの部類に属していると江馬は解釈している。

八、ある歳事に附随して起こること↓宇佐八幡と石清水八幡の放生会、各地方の夷祭など

以上のような分類を行っている。四、の縁のある日に行うものとは、各社の伝承や神話に於いて、御神霊が顕現された日、すなわち御生された日に祭礼日に定めた事や、日光祭のように家康の命日に齋行される事を指している。

#### 4、歳事の形式

そして、歳事の形式と題して、骨子となる部分を挙げている。

一、見ることを主とするもの↓白馬節会、齒固、花見、観月など

二、見聞くことを主とするもの↓踏歌節会、萬歳、鳥追など

三、觸ることを主とするもの↓菓玉、菊のきせ綿など

四、飲食を主とするもの↓屠蘇、雑煮、粽、土用鰻など

五、貼ることを主とするもの↓元三大師札、牛王札など

六、掛けることを主とするもの↓茱萸囊、にらみ鯛など

七、挿すことを主とするもの↓松枝、柀鯛の頭など

八、立てることを主とするもの↓七夕笹、花の塔、事始の日の笹など

九、打つことを主とするもの↓七草、粥杖など

一〇、焼くことを主とするもの↓左義長、釈迦堂お松明、鞍馬や戸隠の火祭若草山焼など

一一、射ることを主とするもの↓破魔矢、射礼、歩射など

一二、点火を主とするもの↓盆燈籠、秋田竿灯、俵武多、万灯、一色大提灯、送り火など

一三、流すことを主とするもの↓七夕笹流、祓の人形流など

一四、着ることを主とするもの↓更衣など

一五、浴することを主とするもの↓菖蒲湯など

一六、寝ることを主とするもの↓大原雑魚寝、寝正月、初夢など

一七、売買を主とするもの↓初売買など

一八、乗ることを主とするもの↓船乗始、馬乗始など

一九、撒くことを主とするもの↓節分投豆など

二〇、蹴ることを主とするもの↓蹴鞠、七夕鞠など

二一、競技を主とするもの↓鬪鶏、騎射、印地、ペーロン、相馬野馬追など

二二、遊戯を主とするもの↓羽子突、毬杖など

二三、装飾を主とするもの↓蓬葉、鏡餅、門松など

- 二四、書くことを主とするもの↓吉書、七夕など
  - 二五、演芸を主とするもの↓門附、顔見世、屋台山車・車楽など
  - 二六、宴を主とするもの↓節会、内宴、町羹、庚申待など
  - 二七、拝礼を主とするもの↓四方拝、小朝拝など
  - 二八、論議を主とするもの↓釈奠、評定始、定考など
  - 二九、祭を主とするもの↓祭など
  - 三〇、掲揚を主とするもの↓涅槃像など
  - 三一、駈けるを主とするもの↓賀茂競馬など
  - 三二、注水その他のもの↓消防出初、汁かけ祭、水取など
  - 三三、切ることを主とするもの↓鞍馬竹伐など
  - 三四、植えることを主とするもの↓田植など
  - 三五、追うことを主とするもの↓追儺、鬼追など
  - 三六、供養法会を主とするもの↓棚経、座頭積塔、仁王会など
- 以上のものを挙げていますが、言わば、各歳事が持っている性格について考察したものと考えます。中には歳事の範疇に入るか微妙なものもあるが、歳事が齋行されている期間内で中心となる儀式・儀礼に焦点をあて、分類されているので、広義としてとらえると、歳事の一つと数える事が出来るのではと考へる<sup>②</sup>。

以上のように江馬が分類した内容を四つの要点に分け、江馬の考えをまとめた。簡潔に述べると以下ようになる。

- ①歳事の内容
- ②歳事を齋行する組織の構成
- ③歳事の派生とそれに伴う齋行日の法則
- ④歳事の性格

このように四点の視点をを用いる事で祭礼・行事の特性を見出せるのではないかと考える。ただ、江馬が「歳事史」を研究した年代は昭和初期ごろから戦後直後という時代であり、現行祭祀では当てはまらない事が多くなりつつあ

る。例えば、祭礼日の変更、祭祀組織の変化、また参加・見学する民間の人々の信仰の変化など様々な点がある。江馬自身も歳事について研究する場合は、時代の変化を感じ取った上で取り組むべきと述べている。歴史的变化自体、研究の対象となるので、過去の歴史だけでなく、現行祭祀を見ながら、今後どのような変遷・変化を辿るのかを想像するのも「歳事」研究の一つと述べている事が江馬史学の特徴とも言える。江馬は、同じ組織内で齋行され続けている祭礼・行事でもやはり変化は伴うのが必定であると見ている。その事も十分に認識した上で、「歳事」を見る必要性がある。例えば、歳事の大半を享受、模倣した民間の祭礼・行事は独自の発展を見せている。前述した「ダシ」と呼ばれるものは、「久世舞車」や「造山」から発展を見せ、中世末から近世期にかけて、装飾の華美化や装飾作成の技術向上の結果、山鉦や屋台に、また、小型・軽量化の技術を用いた結果、ダンジリなどに進化したきつかけもここにあると考へる<sup>③</sup>。

宮中や社寺の歳事は、中世末の大乱のよって大半が廃絶・中絶した。武家は幕府や治国領土の変化により、歳事に変更・変化が起こった。民間では流行り廃りが激しく、各時代での風流、流行の影響を受け続けた。それぞれ大きな変化が生じたが、そのたびに各組織内で継承されていたものを手がかりにして再興、継承されている。例えば、元禄七（一六九四）年に再興された賀茂祭に関しても、宮中と賀茂下上社との関わりだけで再興されたのではなく、四月中西日で齋行を続けるために支援にまわった幕府の存在も見逃せない。さらに雅楽の面に於いても、「東遊」について宮中や幕府はその術を失っていたが、楽人の狛家（辻家）と鴨社河合社正禰宜の鴨祐之が会得していたため、再興することが出来た。<sup>④</sup>「各組織の相互作用」により歳事は継承・維持されているのである。そして、江馬が第一線で精力的に活動していた昭和初期ごろの京都では、宮中や武家の存在や思想、観念などは希薄なものになりかけていた<sup>⑤</sup>。そこで、各組織の行動を把握し、歳事そのものを理解していた有職故実家のもとに社寺側は歳事の再興を依頼し始めるのである。そして、

その代表として江馬が選ばれ、京都の祭礼と深い関わりを持つていくのである。

#### 四、江馬務と京都の祭礼・行事

ここからは、江馬が関与した歳事について触れていきたい。京都の祭礼は、日本の祭礼と言っても過言ではない。京都を基点として祭礼を考える事は必要不可欠である。その上で、郷土色と、それぞれの祭礼の歴史について、考察していかねばならない。その両方を把握している有職故実家は、祭礼について語る事が出来る人物である。その中でも、前述した「五つの歳事の系統」を念頭に置いた上で、歳事を見続けている江馬務は、京都の祭礼を語る事が出来る人物であった。その江馬が、京都の祭礼と深く関与していく。その様子を見ていきたい。但し、江馬コレクションは膨大にあり、当時の詳細な状況は調べきれなかったが、江馬の「歳事史」に関わる著作物、論文や随筆などを参考にして見ていきたい。<sup>(33)</sup>

#### 1、各社寺の節分・追儺式

現在、二月の風物詩として、各社寺の節分の様子が報道される。特に京都の節分祭を代表するものに吉田神社の節分祭があげられる。二月二日の夜に、方相氏が、赤・青・黄の鬼を退治する「追儺式」は、たくさんの参拝客の眼前で齋行されている。しかし、この追儺式は、江馬が考証・指導したものである事はあまり知られていない。昭和三年、当時の林官司が、吉田神社付近に住んでいた鈴木鼓村に相談したところから始まる。<sup>(34)</sup> それまでの吉田神社の節分に関する歳事は、節分前日に大元宮前に厄塚（厄神塚）を立て、大元宮と八本の注連縄と結び付けられる。この塚に厄神を封じ込め、八百万の神々の御力で災いを祓い、黄色の御札が頒布されるといふものであった。



写真一、吉田神社大元宮前の厄塚  
(筆者撮影)

その鈴木鼓村から近所に住んでいた山上忠麿に相談した。<sup>(35)</sup> この山上忠麿は、江馬が主宰をしていた民俗研究会の禮典部長を務めていた。山上は、この当時、賀茂社に奉職しており禰宜にまで昇進した人物である。山上は江馬と民俗研究会に相談をして、吉田社での追儺式を齋行する準備に入った。江馬自身、追儺式の齋行にたずさわるのは初めてでなく、大正七（一九一八）年二月三一日に、平安神宮に於いて追儺式を齋行している。<sup>(36)</sup> これは大正四（一九一五）年の大正の大典をきっかけに、宮中で齋行されていた儀式を再興する機運が各神社で高まった事から派生している。<sup>(37)</sup> さらに、大正一〇（一九二一）年二月三日、梨木神社に於いて、追儺式が齋行された。その式次第が『日本歳事史 京都之部』に書かれている。

一、午後六時上卿以下神楽殿前に整列す

一、衛府は一の鳥居前を警固す

一、齋郎は桃弓葦矢を上卿以下に授く

一、方相氏は俵子を率いてこの鳥居前に北面して立つ

一、齋郎は上卿以下を率いてその背後に列せしむ

一、陰陽師は齋郎を率いて拝殿に上り坐す

一、近衛は拝殿に上りて楽を奏す

一、陰陽師は呪文を朗読し、楽師と階を下る

一、方相氏は大聲楯を以て鉾を撃つこと三度群臣呼応す

一、方相氏は庭を走り鬼を追うこと三回、俣子上卿以下之に従って大聲之を追い矢を射、一の鳥居前に至りて止む

とある。これらの次第は江馬が『政事要略』などを参照し、平安期、内裏にて齋行された追儺式を再現した<sup>(38)</sup>。

装束に関しては、宮中の年中行事などが描かれた絵巻や屏風を参考にしたようである<sup>(39)</sup>。二つ目の次第にある衛府は、衛士の事である。装束は、細纓冠に綏が付いたものをかぶる。褐衣に白奴袴、裸足で松明を捧持する。方相氏は、黄金四目の面を被り、玄衣朱裳を着用する。右手には鉾、左手には楯を捧持。高下駄（黒足駄）を履いて練り歩く。俣子は、方相氏に従う子供（童子）の事である。本来は二〇人であったが、後の時代に八人に變化した。朱の末額を頭に巻き、藍筒袖の闕腋袍、白奴袴、葉脛巾を着して、弓矢を捧持する。

これらに従い吉田社の追儺式が齋行されるようになった。

一、衛府、鳥居前を警固（午後六時）

一、上卿以下整列

一、齋郎は桃弓葦矢を上卿に渡す

一、方相氏、俣子（四人）を率いて北面列立する

一、陰陽師は齋郎を従え、拝殿に昇殿する

一、近衛は拝殿に昇殿のち奏楽

一、陰陽師は祭文朗読

一、方相氏は大声を發し、鉾を以て楯を三度打つ

一、方相氏は鬼を追う

一、上卿以下之に従って矢を射ながら一の鳥居に戻る

以上のように基本的に同じ構成となっている。ただ、これらの追儺式には鬼は登場しない。鬼は本来、無形なるものと解釈されていた為である。その後、吉田社の宮司が森口氏に変わってから、参拝客の要望もあり、鬼（赤・青・黄）を登場させるようになったと言われる。江馬は具体化した鬼を登場させる事には抵抗があったようで、ほぼ同時期（昭和六（一九三二）年）に考証・指導にあたった鞍馬寺の追儺式には具体化した鬼は登場させていない。これは、現行祭式に於いても、吉田社は方相氏と鬼の対決で盛況になり、鞍馬寺では、殿上人が放つ葦の矢を取り合う事で盛況となっている。



写真二、吉田社の追儺式（戦前）  
（『年中行事』〈アルス 昭和一九年〉より転載）

## 2、時代祭と染織祭

江馬は前述しているように、「歳事史」の研究家でもあり、「風俗史家」でもある。特に、有職故実と直結する風俗史学での祭礼との関わりは、装束となる。江馬が装束の時代考証などを担当した歳事に、時代祭と染織祭がある。

時代祭は、明治二八（二八九五）年、平安遷都一一〇〇年記念事業として、平安神宮が創祀された。この年より神幸祭として始められたのが、時代祭である。桓武天皇の御代から明治維新までの一一〇〇年の歴史を語る祭礼として斎行される事になった。時代祭は、車駕東幸・東京奠都後、廃退した京都の復興を象徴する祭礼となり、京都市民総出で祝した。各時代の装束の考証として、久保田米僊と金子錦二が務めた<sup>④</sup>。当初は、延暦文官参朝式、同武官出陣式、藤原文官参朝式、城南流鏑馬式、織田上洛式、徳川城使上洛式、維新勤王隊列、丹波弓箭組、神饌供進組、鳳輦の構成で行列が練り歩いていた。昭和一〇（一九三五）年に、楠公上洛式、豊公参朝式を加える為、関保之助、猪熊浅磨、出雲路通次郎、猪飼嘯谷が考証委員を務めた。時代祭は、男性のみが練り歩いていた。女人列が加わるのは、終戦後の昭和二五（一九五〇）年からである。



写真三、時代祭の神幸列（戦前）  
『京都平安神宮時代祭絵葉書』より

一方、女性を中心となり、練り歩いていた祭礼が染織祭である。現在、京都市民の中で、染織祭という祭礼が斎行されていた事を知っている人は少ないであろう。戦前、時代祭と匹敵する時代行列であり、現存している写真や絵葉書を見ると、大勢の観客が詰めかけている様子が見える。昭和六（一九三一）年四月一日～二日に第一回の染織祭が斎行された。この祭礼の派生の要因は、京都に染織講社が結成され、平安神宮に併設されている岡崎公園内に臨時の祭場を設けて神社が建てられた事にはじまる。行列の構成としては、上代の機殿参進の織女、奈良期の歌垣、平安期のやすらい祭踊、鎌倉期の女房の物語、室町期の諸職の婦女、桃山期の醍醐の花見、江戸前期の小町踊、江戸後期の京女の晴着姿というものであった。練り歩く女性陣は、京八花街の芸奴・舞奴が扮した。この行列に着用する装束は全て新調したという。この染織祭の考証を務めたのが、時代祭と同じく、関保之助、猪熊浅磨、出雲路通次郎、猪飼嘯谷であった。



写真四、染織祭の奈良時代の歌垣（昭和九年）  
『染織祭時代行列絵葉書集』（染織講社発行）より



写真五、染織祭の平安時代のやすらい花踊（昭和八年）  
『染織祭時代行列絵葉書集』（染織講社発行）より

そして、この二つの祭礼に関与していたのが江馬務であった。戦前、女性  
が練り歩く祭礼は染織祭だけであつたので、特に染織祭に力を入れていた事  
が歳事史研究の著作の中から見出される。戦後刊行された『京阪神の年中行  
事』や『日本歳事全史』には、前述した四人の研究者と共に齋行に関与した  
事が書かれている。この染織祭は、昭和六年から始まったが、昭和一二  
（一九三二）年をもって中絶した。昭和一二（一九三二）年七月に起こった盧溝橋事件か  
ら発する日中戦争が影響した為、昭和一三（一九三八）年以降、行列が中絶  
された経緯がある。<sup>(42)</sup> その為か、江馬は、戦後刊行された著作に復活を希望す  
る旨の文章がよく見える。なお、時代祭も、昭和一二年の行列巡行は中止さ  
れている。

何故、江馬はここまで、染織祭にこだわったのかを見ていくと、女人列に  
対する考証に重点が置かれている事が分かる。江馬の様な風俗史学の研究者

や有職故実に関する研究者は、装束を中心にして祭礼を見る傾向が強い。そ  
の装束の花形は何と言っても女性が着用する装束である。現行祭祀に於いて  
も、賀茂祭や時代祭の女人列の気持は高い。ここ数年、女人列に参列希望を  
申請する人数は増加し続けている。装束の色にしても、男性の装束は黒や退  
紅、平安期に大流行した二藍色などが主であるのに対して、白色や黄浅緑色  
萌黄色など華やかであると同時に優雅さを表現する色合いの装束が中心と  
なっている。時代的に女人列が参加出来ない状態であつた事も加味すれば、  
女人列の演出はやりがいのある仕事であつたであろう。これに加え、染織祭  
に於いて江馬と同分野の人物がいた事が意識にあつたかも知れない。その人  
物とは、吉川親方である。親方は、画家であると同時に、当時の時代劇など  
の映画で、時代考証や美術監督を務めるなどの有職故実に関する専門家でも  
あつた。親方自身も、時代祭や染織祭に深く関与しており、女人列や他の研  
究分野についても江馬と重なっている部分が非常に多い。親方の研究をして  
いる藤本恵子氏の研究によると、当初は、江馬と親方は「風俗研究会」など  
で一緒に研究をしていたが、昭和六（一九三一）年頃から不和を生じて交流  
が減り始めている事を指摘している。<sup>(43)</sup> また、染織祭に出された装束をまとめ  
た『歴代服装図録 染織祭篇』の「序」には、<sup>(44)</sup> 親方の名前は見えるが、江馬  
の名前は無い。さらに、親方自身の日記には、染織祭に関する打ち合わせを、  
関・猪熊・出雲路・猪飼の責任者と頻繁に行っている事が書かれている。<sup>(45)</sup> 江  
馬と同じく女人列に関する考証をしていただけに気になる存在であつただろ  
う。<sup>(46)</sup> 二人が取り組んだ染織祭の女人列の研究は、昭和二五（一九五〇）年に  
再興された時代祭に採り入れられ、各時代の婦人列が加わる事となった。さ  
らに昭和四四（一九六九）年には、女房衣裳について再考があり、江馬が担  
当者として指導している。また、昭和三一（一九五六）年に齋王代列が再興  
された賀茂祭にも大きな影響を与える事となる。

### 3、賀茂祭（葵祭）

江馬が、特に祭礼の研究に取り組んだのが、賀茂祭（通称、葵祭）である。江馬の年譜を見てみると、大正五（一九一六）年、三三歳の時に、江馬邸に於いて、「葵祭の行列服装に就て」と題して研究発表をしているのを皮切りに、同じ大正五年に「加茂祭の沿革及其服装」<sup>(47)</sup>を、翌年大正六（一九一七）年には、師である林森太郎と共に編集をした『賀茂祭解説』<sup>(48)</sup>を世に出した。江馬は著作の中で、「（前略）これ賀茂祭で神社祭禮中の霸王であるから特に稍詳細に述べる。」<sup>(49)</sup>とか、「この祭は平安朝の服装を正確に着用され故實に誤のない點で、日本無比の古典的絢麗なもので宛然繪巻物を展開したといつても過言でない。」<sup>(50)</sup>また、「葵祭は有職の法則に一々あてはめて、一物一色とても勝手にとりかへたものは稀だといふことは驚異に値することであり、葵祭の眞に分る人は、ただ有職故實に理解ある人のみの特権である。」<sup>(51)</sup>と述べ、装束や有職故実の点に重点を置きながら、古来、賀茂祭の事だけを「まつり」と呼んでいた上古の人々の思いも重ねて、賀茂祭研究に取り組んでいた。

その賀茂祭研究の一つの到達点の論考が「賀茂祭の研究」<sup>(52)</sup>と『改訂 賀茂祭解説』<sup>(53)</sup>であろう。賀茂祭の行粧（賀茂下上社では行列の事を行粧と呼ぶ）に於いて、練り歩く各所役の名称、官位、装束に至るまで詳細に書かれている。賀茂祭の各所役は、朝廷の役人が、賀茂下上社を参詣するので、朝廷内の官位に応じた装束を着用する事が必要である。ただ、平安中頃から後半にかけて、賀茂祭の所役は花形であり、賀茂祭を見学する「みあれ詣」自体、貴族の中では一種のステータスとなり、装束含め大変華美になっていった。その為、しばしば自肅する旨の命令が発せられている。しかし、その装束は、官位に合わせたと同時に、行粧内での順位を明確にする装束となっている。官位としては中間の位置に立っている者が、行粧内では下位になる為、落ちていた色合いの装束を着用する。特に、傍に上位の者が練り歩く際、外から見ている人々にも分かりやすい表現となっている。ただ、装束を始め、有職故実を把握出来ない者にとっては、よくわからないものである。そこで、

江馬は様々な賀茂祭や歳事関連の著作に丁寧に解説を加えている。特に「賀茂祭の研究」と『改訂 賀茂祭解説』では、装束に関して詳細かつ簡潔に述べている。これらを作成する際に、まとめたと思われる資料が、京都府立総合資料館所蔵・京都文化博物館管理の江馬務コレクションの中にあった。本事業に於いて、調査を行った際に、閲覧、写真撮影する事が出来た。<sup>(54)</sup>題名は「賀茂祭装束色目表」と書かれてある。どの年代に作成されたかは不明であるが、『賀茂祭装束色目表』に書かれた内容は、「賀茂祭の研究」に記載されている内容と同一のものであった。当初、作者や作成年代が不詳であったが、江馬の古文書の取り扱いに癖があった事が分かった。古文書に書かれている書名に対して、江馬が新たな題名を付けているのである。江馬は、時々、古文書そっくりに複製した文書を作成しており、真性の古文書と混乱するケースがあった。しかし、自ら作成した文書には書き込みがされている場合が多く、真性の古文書は手を加えていない。そこから『賀茂祭装束色目表』は江馬自ら作成したものと判断した。ただ、この『色目表』を作成するにあたり、どの史料を用いたかまでは判断出来なかった。今回、京都文化博物館様から翻刻及び研究紀要掲載の許可を戴いたので、『色目表』に合わせて表形式で掲載する。なお、本文中、△の印がある文章は、朱書きされた所である。また、○の印は、朱で書かれているが、『色目表』の前半部分に掲載された所役の装束と同一のものに印を付けたものと考えられる。





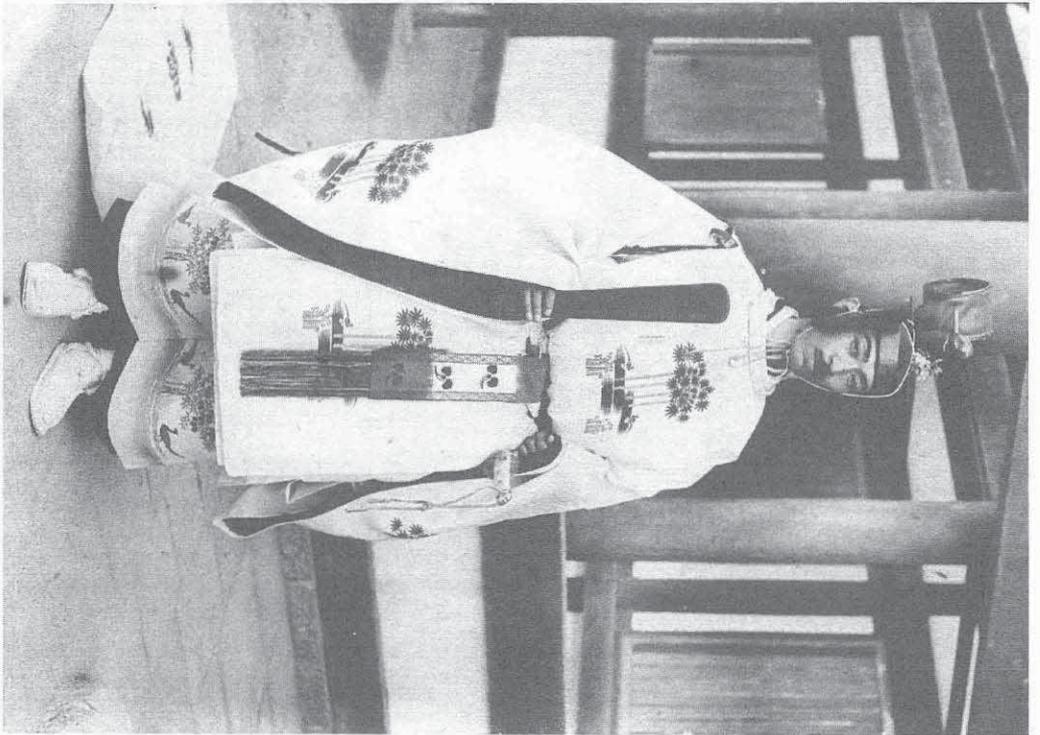




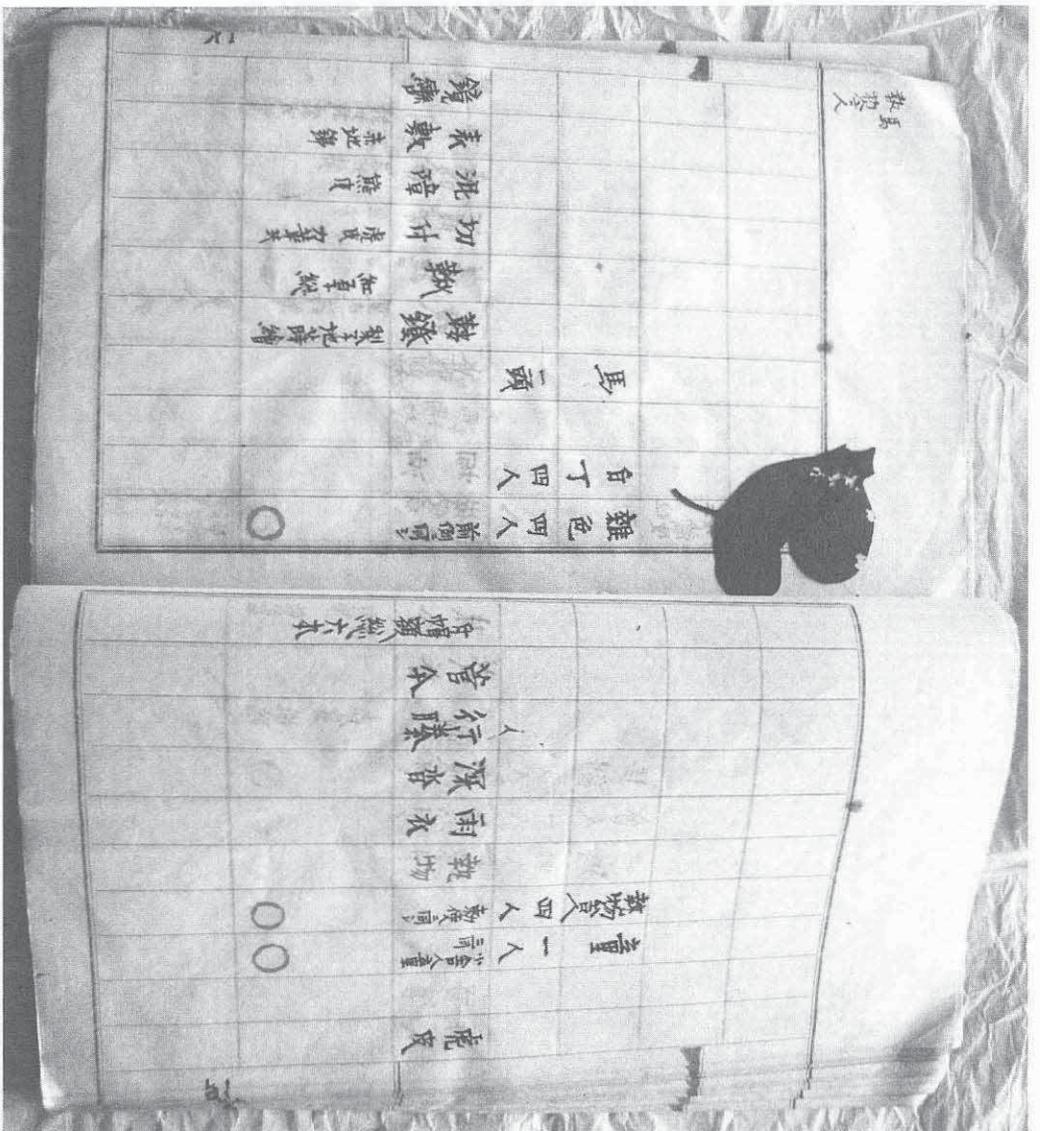








写真七、御蔭祭の舞人の装束〔歴代風俗写真集〕一、二、〔賀茂御蔭祭の舞人の姿〕〔芸艸堂 大正八年〕より転載。〕  
 賀茂祭の舞人は、勅祭である為に、近衛府の五位の武官の位に合わせた装束を着用するが、御蔭祭は、鴨社の鴨氏の祭祀である為に、楽人達は、神事用として、綵櫻の挿頭花を付けた巻纏の冠を被り、桐竹鳳凰の青摺衣の小忌衣を着用する。なお、装束を着用しているのは、江馬務本人である。



写真六、〔賀茂祭装束色目表〕(挿まれているのは、双葉葵)  
 (京都府立総合資料館所蔵・京都文化博物館管理)

賀茂祭と江馬は、戦後の齋王代再興に尽力したが、莫大な資金が掛かる上、行政との関わりがあり、助言程度に留まっていたが、テレビやラジオで、晩年まで賀茂祭の解説をしていた。<sup>55)</sup> 生前の肩書きに於いても、「葵祭保存会」・「葵祭行列協賛会」の委員の名称は必ず書かれている。賀茂祭に対する思い入れの度合いが高い事が想像できる。

## 五、終わりに

江馬務と言えば「風俗史」の研究で有名であるが、一方、祭礼・祭事・行事・習慣などの年中行事を総まとめにした「歳事史」の研究の一端に触れてみた。本事業に於いて、平成七（一九九五）年に、神社本庁より出された『全国神社祭礼総合調査』（通称、『平成「祭」データ』）を用いて、各都道府県の祭礼を調査しているが、江馬が「歳事史」研究で述べていた部分を活用すれば、郷土色に重点を置いた年中行事や祭礼に対する理解度が増したのではと思う。今改めて、江馬の論考を読み直すと、時代感の差は拭えないが、祭礼調査の基本的部分を指摘されているようである。各地域の祭礼を見る為には、その地域の歴史や祭祀に関わる組織の構成、外因的要因（政治的、経済的）なものや、歳事を彩る文化や技術面の存在を重視する必要がある。それらを総じて「有職故実」という文言にたどり着くのではと考える。

江馬は、歳事が人々に与える影響を次のように考察している。「年中行事は人心に對して大なる影響を與へ社會にも感化を送る。今之を検討する時、次の如きものが數へられる。」として五つの点を挙げている。<sup>56)</sup>

一、心理上に及ぼすもの↓忠君愛國、敬神思想、敢闘精神、芸術思想發揚、美的情操、一家団欒など

二、經濟上に及ぼすもの↓市が立つ、交通發達、生計の計算など

三、交通の發達↓神幸祭の行列の變化に伴う交通手段の變化など

四、藝術の發達↓山車・屋台類の彫刻の進展、年中行事に関する繪卷・屏風、

歌舞音曲の進歩など

五、風俗の變化↓華美禁令に伴い服装に變化をもたらす、代わりとなる新素材の使用など

以上の点に於いて、歳事がもたらす影響について述べている。これは、本事業に於ける研究対象の一つである「心」の研究に該当する部分が多い。大凡、「心」に関する部分は簡略して述べる傾向があるが、「心」に重点を置くも必要である。「有職故実」は、経験上の人生哲学を文言化・法令化したものとして考えているが、有職故実の中にある「心」の存在を江馬は感じていたのではないかと考える。この「心」の部分には時代感の差は無いと言ってもよいだろう。歳事を継承する「心」を知る手段の一つとして江馬務の考えを用いていきたい。

## 謝辞

江馬務コレクション及び吉川観方コレクションを閲覧・写真撮影及び、「賀茂祭装束色目表」の翻刻・掲載の許可をいただきました京都府京都文化博物館芸課洲鎌佐智子先生と京都府立総合資料館担当者の皆様に感謝を申し上げます。

## 註

(一) 福井県・京都府祭礼資料収集調査：平成二二年三月六日から一〇日まで。調査者―新木直安。調査概要は次のとおり。  
六日―福井県敦賀市。みなとつるが山車会館・敦賀市立博物館に於いて「氣比神宮秋季例大祭（通称、氣比の長祭り）」に関する調査を行った。七日―福井県福井市。福井県立図書館。地元の郷土史をはじめとする資料収集。八日―京都府京都市。京都府立総合資料館。京都府総合資料館所蔵、京都府京都文化博物館保管の現物資料である江馬コレクションと吉川コレクションの閲覧・写真撮影。九日―京都府京都市。京都府立総合資料館。藤貞幹『集古図』の閲覧・複写。井上頼寿、田中緑紅著作資料の閲覧・複写。一〇日―京都府京都市。京都府立図書館。田中緑紅関連資料の閲覧・複写。

(2) 昭和一三(一九三八)年、桂に引越した際、旧宅には、十万冊の蔵書があったと述べている。なお、江馬氏の家系や祖父天江、文章太郎の生い立ちなどについては、江馬すま子「江馬家と江馬務」(日本風俗史学会『風俗』第一九卷第三四号「江馬務先生追悼記念号」昭和五五年)参照。なお、江馬の経歴や著作物の刊行年、各雑誌に掲載された年代などは、中村太郎「年譜」(「江馬務著作集」別巻中央公論社 昭和五七年)を参考にした。ただ「年譜」に書かれている中には、刊行・掲載年代に一部ずれがあり、また書名も一部違う所がある。よって、拙蔵の著作物、研究誌、草稿などに従って書き直した。

(3) その後、幾つかの組織に継承され分割されたが、現在は、京都市立芸術大学(京都市西京区大枝沓掛町)になっている。

(4) 西田直二郎：明治一九(一八八六)年～昭和三九(一九六四)年。京都帝国大学教授。京都女子大学教授。歴史学者。日本文化史を研究。戦前の京都学派の中心人物。江馬と共に所謂「京都学」の基礎を作った人物の一人。  
(5) 山科言繩：天保六(一八三五)年～大正五(一九一六)年。伯爵。有職故実家。装束調達、衣紋の奉仕などを務める。また、明治以降の宮中内に於ける儀式の旧儀再興に尽力した人物。

(6) 猪熊浅磨：明治三(一八七〇)年～昭和二〇(一九四五)年。有職故実家。京都帝国大学講師。京都帝室博物館嘱託。香川県白鳥神社宮司。神社祭祀の研究者でもあり、装束から神饌についての歴史的展開や、文献上に現れた、神社祭祀に用いる「モノ」について研究している。また、猪熊家は、京都の賀茂下上社(賀茂別雷神社と賀茂御祖神社)との縁も深く、猪熊家旧蔵文書には、賀茂祭や、鴨社(賀茂御祖神社。通称、下鴨神社)の氏神祭祀である御蔭祭(古名、御生神事)に関する文献が多数ある。浅磨自身も賀茂祭の考証担当を務めている。また、昭和一二(一九三七)年の賀茂下上社の遷宮の監修を行っている。

関保之助：慶応四(一八六八)年～昭和二〇(一九四五)年。有職故実家。東京帝室博物館学芸員。奈良帝室博物館列品課長。保之助が蒐集した資料は、質も量とも大変優れていたと言われる。明治以前の古武具の蒐集家でもある。東京美術学校(現、東京藝術大学)でも教鞭をとり、自身が蒐集した「モノ」を使い講義を行っていた。昭和二〇(一九四五)年五月二〇日、空襲により戦死。

(7) 林森太郎：旧制第三高等学校(現、京都大学)の講師・教授を務める。日本文学に精通し、特に『万葉集』や『源氏物語』などの研究で有名。また有職故実の研究も有名で、明治三九(一九〇六)年に『有職故実』を世に出す。この『有職故実』の章立ては、江馬自身影響されているようで、江馬が昭和五(一九三〇)年に刊行する『新修 有職故実』(星野書店)の章立てとはほぼ同じで、林が入っていない民間風俗を加えた内容で出されている。江馬自身も『風俗研究』の中で、林の事を「師」と呼んでいる事から有職故実に関して教えを受けた最大の人物であつた事が考えられる。

(8) 猪飼嘯谷：明治一四(一八八一)年～昭和一四(一九三九)年。日本画家。京都市立絵画専門学校(現、京都市立芸術大学)助教授。作品には『大正天皇大礼巻』『御即位礼図』など。

若原史明：明治二八(一八九五)年～昭和二四(一九四九)年? 郷土史家。祇園祭の研究で知られる。『風俗研究』に於いて、祇園祭の山鉾に関する論文「祇園会山鉾の沿革」(一)～(四二)を発表。戦前からの取材ノートが、死後、まとめられ「祇園祭山鉾大鑑」(八坂神社社務所 昭和五七年)が出版された。戦前の山鉾の蔵に調査に入り、古文書などの翻刻を行った。史明がいなければ祇園祭の山鉾に関する研究はほとんど進まなかったとまで言われた大作である。

井上頼寿：明治三三(一九〇〇)年～昭和五四(一九七九)年。祖父に国学者であり、皇典講究所設立に尽力した頼園、父に神宮皇學館教授であつた頼文をもつ民間信仰に関する研究や宮座の研究で有名で、頼寿独特の視点で、綿密な調査を行った。代表作である『京都古習史』は、京都・滋賀の宮座に関する祭祀を研究する上で、今となっては貴重な祭祀資料となるお祭りについても詳細な記事が書かれてあるので、必ず目を通すべき名著である。また大正から戦前まで江馬の風俗研究会だけでなく、田中緑紅(後述)が主宰であつた郷土趣味社の「郷土趣味」にもしばしば名前が見える。戦後は、江馬と同じ活動する事が多いようで、京都府・市が祭祀に関する報告書、郷土案内書をまとめる際には、必ず江馬と頼寿の名前が登場する(京都市産業観光局観光課編『京都郷土芸能誌』昭和二八年、京都市観光局編『京の年中行事』昭和三五年など。ちなみに「京の年中行事」は、江馬や頼寿のほかに、田中緑紅、猪熊兼繁、林屋辰三郎、出雲路敬和が執筆している)。また昭和二三(一九五八)年一月にはNHKで「節分風俗」と題した対談ラジオ番組なども収録している。戦後は、京都國學院で長年講師を務めた。

吉川観方：明治二七(一八九四)年～昭和五四(一九七九)年。日本画家。有職故実家。また戦前から松竹合名会社(現、松竹株式会社)などの時代劇映画などの衣装考証や時代考証なども務める。詳細は本文で述べるが、江馬と同じく京都の祭祀に深く関与する。江馬と同じく風俗史の研究をするが、江馬は学問的、観方は美術的な方向に進んだため意見が対立し、別々の道を歩むようになったと言われる。観方自身も「故実研究会」の主宰となり精力的に活動した。蒐集した装束や衣装などは数万点にもおよび、大半が京都府立総合資料館に所蔵された(現在は、京都文化博物館が管理)。しかし、まだ自宅などに資料が大量にあるために、奈良県立美術館が設立され、二回にわたりコレクションが寄贈された。また福岡市博物館にも吉川コレクションが寄贈されている。

(9) 『風俗研究』第一号は大正五年三月に刊行され、昭和一七(一九四二)年一月に発行された第二四四号を以って休刊となった。江馬自身は刊行を続ける予定

であったが、第二四四号を見ると、当時の戦時体制下で、紙が配給制となり、発行の制限を受けた事を挙げている。休刊以降は単行本化する予定であると予告に掲載されているが、刊行はされなかったようである。結局、昭和一八（一九四三）年五月一日、正式に『風俗研究』廃刊の届出を行っている。

(10) 藪田嘉一郎：明治三八（一九〇五）年～昭和五一（一九七六）年。歴史学者。金石文研究家。西田直二郎の門弟。昭和二六（一九五二）年には、学術出版社である綜藝舎を設立。作家松本清張との親交が深く、古代史研究の面で清張は、藪田から学んでおり「恩師」と語っている。

今井啓一：明治三八（一九〇五）年～昭和五〇（一九七五）年。歴史学者。婦人（渡来人）研究で有名。秦氏などが京都に土着していく経過など綿密に考察している。藪田と同様、西田直二郎の門弟。大阪樟蔭女子大学教授を務める。

久世正富：和歌山・紀州における伝承、風俗などの研究者。串本高校の校長も務める。和歌山歌壇の中心人物でもあった。

藪重孝：歌舞音曲研究家。雑誌『上方趣味』などに於いて、近畿地方の盆踊りに関する研究の論考があげられている。大阪府下に於いても幾つかの盆踊りを再興させるなど民間にあった歌舞音曲の研究を行っている。

草葉孝次：郷土史家。川勝政太郎（後述）主宰の史迹美術同致会のメンバー。また田中緑紅（後述）主宰の郷土趣味社に於いても、メンバーとして京都の石に關する論考をあげている。

重森三玲：本名、重森計夫。明治二九（一九〇六）年～昭和五〇（一九七五）年。日本庭園の研究家。庭園協会の主宰を務める。京都の東福寺や松尾大社の庭園造営にたずさわる。戦後は生け花の世界にも進出した。

なお、『怒佐布玖呂』は「ぬさぶくろ」と読み、旅をする時に、荷物を入れるズタ袋を指す。「頭陀袋」は元々僧侶が修行をする時に携帯していた袋の事であるが、御師などが幣を袋に入れ行脚した「幣袋」からきているという説もある。

(11) 『風俗研究』第二二〇号（風俗研究会 昭和一三年）「主幹あとが記」二六頁。

明石染人：本名、明石国助。明治二〇（一八八七）年～昭和三四（一九五九）年。染織工芸の研究家。京都工芸繊維大学講師なども務める。明治二年の車駕東幸・東京奠都により衰退した京都を文化面で支え、公立病院設立などに尽力した明石博高の息子。

杉浦丘園：明治九（一八七六）年～？ 蒐集家。大黒屋杉浦家一六代目当主。代々、三郎兵衛の名前を名乗る。大黒屋は呉服商を営み、京都を代表する店舗となった。丘園の蒐集範囲は、大変広く天皇の装束から寺の鐘、千社札や商店の看板に至るまで蒐集を行った。これらの蒐集品は、丘園が蒐集していなかったら現在に伝わらなかつたと言われるものばかりである。蒐集した目録は、『雅楽堂難助集』や『雅楽堂好古雑誌』などに編纂し発行している。

田中緑紅：本名、田中俊次。明治二四（一八九一）年～昭和四四（一九六九）年。郷土史家。民俗学者。大正六（一九一七）年に郷土趣味社を発足。民間信仰に重点を置いた研究を行う。大正七（一九一八）年には、『郷土趣味』を刊行する。

当時、民俗学で流行していた性信仰に關して、何号も連続して特集を組むなど独特の民間信仰研究誌を作り上げる。『郷土趣味』には、前述したように井上頼寿や中山太郎らも参加し、柳田・折口路線とは一線を画した存在となる。戦後は、安井金比羅社で京都の祭礼や伝承を語る「京を語る会」を発足。その後、京都の事を知る上では、絶対に欠かせない『緑紅叢書』（全五三巻）を世に出す。ただ、内容には問題点が幾つかあり、例えば、根拠となった資料・文献などが、明記されていない点などがあるが、京都の文化・風習・伝承・祭礼のほとんどが網羅されており、現在は無くなった島原に關する記事も多く、さらに聞き取り調査を行った部分も多く、参考になる記事が多い。

他には、戦前、郷土趣味社から刊行していた『奇習と土俗』、『土俗大観』や『京都』などがあり、戦後の「京を語る会」からは、『京の面影』などを編纂している。また緑紅の趣味であった宝船の蒐集でも有名である。さらに各地方の絵馬も蒐集しており、それらをまとめた『絵馬鑑』を刊行する。

これらに加え、郷土玩具の世界でも有名であり、画家の川崎巨泉（明治一〇（一八七七）年～昭和一七（一九四二）年）らと共に、『鳩笛』を刊行。また「ちどりや」という名で、各地方の郷土玩具や絵葉書などの販売する店舗を持っていた。石井琴水：郷土史家。浄瑠璃研究家。史蹟伝説研究会の主宰を務める。大正四（一九一五）年から刊行された雑誌『上方趣味』などで活躍する。歌舞伎や浄瑠璃の芸能から祇園の町の文化についての著作がある。

川勝政太郎：明治三八（一九〇五）年～昭和五三（一九七八）年。石造美術の研究家。昭和五（一九三〇）年に史迹美術同致会を発足。機関紙である『史迹と美術』を刊行。大手前女子大学教授などを務める。

栗野秀穂：明治一八（一八八五）年～昭和一三（一九三八）年。歴史学者。地理学者。西田直二郎の後輩。神宮皇學館卒業後、京都帝国大学史学科入学。京都市内の学校で教鞭をとりながら、『史蹟と古美術』を刊行。史学地理学同致会、国史普及会を創立。西田と共に戦前の京都学派の一人であった。

(12) 江馬務『日本歳事全史』（白井書房 昭和二四年）二五五頁。

(13) 主な「歳事」そのものの著作物・論文を見ると、『日本歳事史 京都之部』（内外出版株式会社 大正一一年）、『改訂日本歳事史 京都之部』（内外出版株式会社 昭和四年）、「歳事の研究」（風俗研究会編『風俗研究』一一四号 風俗研究所 昭和四年）、「歳事研究」（立命館学叢二卷一號 立命館大学出版部 昭和四年）、「歳事の研究」（一）～（三）（『国風』二五卷九～一一号 昭和一二年）、「年中行事について」（風俗研究会編『風俗研究』二二二号 風俗研究所 昭和一三年）、「年中

行史(『國華』六月号 國華社 昭和十三年)、「年中行事の調査法及びその研究法」(日本歴史地理学会編『郷土史研究の調査と方法』地人書館 昭和十九年)、『年中行事』(アルス文化叢書三九 アルス 昭和十九年)、『京阪神の年中行事』(京阪神叢書七 宝書房 昭和二十三年)、『日本歳事全史』(白井書房 昭和二十四年)、『京の年中行事』(京都市観光局 昭和三十五年)などがある。

(14) 中村直勝：明治二三(一八九〇)年、昭和五一(一九七六)年。歴史学者。中世史の研究で有名。晩年は京都の民間信仰にも研究範囲を広げた。京都女子大学教授、大手前女子大学学長を務める。

柴田實：明治三九(一九〇六)年、平成九(一九九七)年。歴史学者。大津宮から中世の庶民信仰、京都市の歴史編纂に至るまで広範囲での研究で知られる。所謂、「京都学」に多大なる影響を与えた人物。京都大学、関西大学、仏教大学の教授を歴任。

林屋辰三郎：大正三(一九一四)年、平成一〇(一九九八)年。歴史学者。古代から現在までの京都の歴史をまとめあげた研究者。藝能史研究会を創立。京都大学教授、京都国立博物館館長などを歴任。「京都学」提唱者の一人としても有名。井筒雅風：大正六(一九一七)年、平成八(一九九六)年。服飾研究者。有職故実家。江馬の後継者として有名。日本服飾史研究の第一人者。装束・衣装の蒐集家とも知られる。株式会社井筒(井筒装束店。井筒法衣店)八代目店主。昭和一九(一九四四)年には、神職装束や神社有職故実の研究を進める為に、「宗教文化研究所」を設立。また、昭和四九(一九七四)年、風俗博物館を設立。館長兼主任学芸員を務める。

(15) メンバーには、会長に、鷹司信輔(神社本庁統理、明治神宮宮司)。顧問に、甘露寺受長(宮内庁掌典長)と浅野長武(国立東京博物館館長)、石川岩吉(國學院大學学長)。常任委員には、高階研一(神社本庁事務総長)、八束清貴(神社本庁嘱託、元掌典)、河鱒実英(昭和女子大学教授、東洋大学講師)。委員には、室町公藤(掌典)、川出清彦(掌典)、芝葛盛(宮内庁書陵部)、中田虎一(元宮内省御用係)、山辺知行(東京国立博物館染織室)、日野西資孝(同上)、西角井正慶(國學院大學教授)、座田司氏(鶴岡八幡宮宮司)、江馬務(京都女子大学教授、風俗研究会会長)。幹事に、岡田米夫(神社本庁調査部長)、本居彌生(神社本庁参事)、井筒雅風(宗教文化研究所所長)がいた(肩書は全て当時)。「風俗研究」第一巻第二号(宗教文化研究所 昭和二八年)、『神社新報』(一般)後継者の養成と伝統の周知 有職故実研究会発足(昭和二八年一月二六日付、第二面)参照。なお、この『風俗研究』は、戦後復刊されたもので、風俗研究会からではなく、有職故実研究会発足に伴って、「宗教文化研究所」が発行したものである。戦前の『風俗研究』と混乱をさける為、京都府立総合資料館などでは『復刊 風俗研究』という雑誌名で登録されている。

(16) 梅棹忠夫：大正九(一九二〇)年、平成二二(二〇一〇)年。民族学者。文化人類学者。国立民族学博物館館長。江馬の晩年から刊行が始まった『江馬務著作集』刊行会の発起人の一人。江馬研究を「歴史の可視像化」と評した内容は、『江馬務著作集』第一巻(初版)のオビに書かれている。

(17) 但し、江馬は、あらゆる分野や先行研究者から「有職故実」を吸収し、「風俗史学」に発展させている。その点に留意して江馬研究をする必要性がある。また、「有職故実」と「風俗史学」の概念についても、現行の研究と多少意味が変化している所にも留意する必要がある。

(18) 「歳事の研究」(風俗研究会編『風俗研究』一一四号「神宮式年祭及び年中行事」風俗研究所 昭和四年)また、『江馬務著作集』第一巻「風俗文化史」(中央公論社 昭和五〇年)にも所収されている。

(19) 「年中行事の調査法及びその研究法」(日本歴史地理学会編『郷土史研究の調査と方法』地人書館 昭和十九年)

(20) 前掲註(12)。なお、『江馬務著作集』第八巻「四季の行事」(中央公論社 昭和五二年)にも所収されている。

(21) 「ダシ」などの類の意義に関する起源は、「御霊」や「疫神」対策などの様に、諸説あるが、近世後半頃に齋行されていた都市圏での祭祀については、地誌などで確認していくと大半が商業目的として表現されている事がある。例えば、近江国(滋賀県)長浜の曳山祭(長濱八幡宮)などは、各曳山(屋台)は、長浜の本店がスポンサーとなり、練り歩いている。当時の民衆達は、曳山の名前を聞いただけで、何処のお店か分かったと言われている。各大店が競いあうように、意匠を凝らしたモノを作成した為、しばしば贅沢禁止の対象になった事は有名である。これは、近世期の「風流」の作用が働いた現象の一つとして見る事が出来るであろう。さらに本事業に於いて出張調査を行った(前掲註)「氣比の長祭り」の越前国(福井県)敦賀の氣比神宮の山車の祭りでは、「大山車」と「小山車」が練り歩いていたが、「小山車」は一台あたり、一つの店が個人的に所有している「山車」であった。店の収益の状態で売買されていたようで、宣伝目的の用途で使用されていた可能性のある事が指摘されている。最大で「小山車」だけで四〇、五〇台近く練り歩いていたと記録されている(石塚資元編『敦賀志』(嘉元年間成))。

(22) 武家の六月一六日の嘉祥は、室町時代末から始まった行事と考えられている。疫病を防ぐため、一六個の餅や菓子等を神前に供えたという。近世期に入り、主君から家臣達に菓子が配られる形へ変化した。後に民間にも伝承し、一六文で菓子をかうようになったと言われる儀式の事。

(23) 八瀬天満宮社(京都市左京区八瀬秋元町)にて、五月五日に齋行されている例祭の事を指す。通称、氏神大祭と呼ばれる。現在も宮座が残っており、宮座単位で祭祀が齋行されている。また、祭祀には、「ダシ」との関係が大変深い「剣鉾」

が練り歩き、京都の古い形を維持している祭礼である。一〇月中旬に斎行される境内社の秋元神社の祭礼である「赦免地踊り」は有名で、京都府無形民俗文化財に指定されている。

(24) 元々は中国から伝わり宮中で行われていた年中行事の一つで、旧暦一〇月亥日に亥子餅を食して疫病封じや子孫繁栄を祈ったとされる。武家社会でも行われていたが、民間に伝承されると、稲刈りが終わった時期に合わせて行われていたため、収穫の感謝の意味も込められるようになったと言われる。現在も行われており、主に西日本でよく見られる。

(25) 小野篁開基と伝えられる千本あんま堂（正式名、光明山歙喜院引接寺。京都市上京区千本通り廬山寺上ル）にて行われる千本あんま堂大念仏の事。境内に咲く、普賢象桜が咲く頃に合わせて行われていた。現在は、五月一日～四日に狂言が奉納される。

(26) 後白河上皇創建、後嵯峨上皇再建の蓮華王院三十三間堂（京都市東山区三十三間堂廻り町）にて、行われていた行事。中世末には行われていたと伝えられ、「通し矢」の名前でも知られる。旧暦では四月・五月に行われていた。しかし、射手の人数が多くなりすぎた上に、近世期は、各大名のお抱えの射手を競い合うように出させた為に、六月に変更された事が多かった。ただし、明治初期には絶えている。現在、一月の行なわれている正月の弓引き初めは、成人の日に合わせて行われている為、直接の繋がりはないが、江馬が分類分けした「六」の人事の都合により日程が定まったものに該当する行事の一つとなっている。

(27) 位階昇進の儀式。旧暦四月七日に選ばれた人物の位階を仮に定めた名簿を奏上した儀式の事。

(28) 旧暦五月・一二月に検非違使が、着欽した囚人を笞（むち）で打つ真似をした儀式。

(29) 掲載した分類は、『日本歳事全史「序説」に従ったが、前掲註(18)に挙げた「歳事の研究」に於いては、

「一、見る、二、見聞く、三、觸る、四、飲食、五、貼る、六、掛ける、七、立てる、八、焼く、九、流す、一〇、着る、一一、浴する、一二、寝る、一三、売買、一四、乗る、一五、書く、一六、競技、一七、遊戯、一八、装飾、一九、演芸、二〇、宴、二一、論議、二二、拝礼延見、二三、法会、二四、祭典」

以上の二四点が挙げられている。江馬自身は、「この位では、まだ盡さないのがあるが、概観のことであるからこの位として（後略）」とまとめている。『日本歳事全史』は、戦後直後に出版された事もあり、項目の差は、当時の日本の状況（歳事研究や祭礼に対する捉え方の変化）も加味した上で、考察すべきではないかと考える。

(30) 江馬は、「ダシ」に関する考えとして、室町時代は、神社祭礼が大発展を遂げ

た時代と考察し、その付随として、造山、舞車、傘鉾、囃子物などが生じたと考えている。その要因としては、祭礼の行列が美化し、祭礼の内容が娯楽の様相を増した事を指摘している。さらに「ダシ」の類は、「文化開発」と「経済増額」の作用により、進化している事を述べている。『日本歳事全史「序説」(九頁上)に、「その形式も漸次文化開発、経済増額によりて進化していく。山から山車へ、更に山笠へ、佻武多へ、舞車からねり物、屋台、鉾へと進む。」と述べている。特に「ダシ」は経済的な面での作用は大きい。近世中期から後期にかけて、「ダシ」が社寺祭礼に大量発生した背景には、幕府や藩の政策によって各地の殖産興業が成り立ち、経済的支援が祭礼に用いられるようになったと考える。特に、近江商人の動向は、近世日本の経済だけでなく、技術面や文化面、一部では政治的な面に於いても、大きな働きをしているところに注目すべき点であると考える。

(31) 拙論「鴨社の御蔭祭―切芝神事に於ける和琴の役割について―」（國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要「第一号 平成二十二年」参照）

(32) 明治二（一八六九）年の車駕東幸・東京寛都に合せて堂上家や巨大な社寺の社家・僧侶などは東京に移動している家が多く見受けられる。言わば、明治後半から昭和初期の東京には直接の関係者（宮中・幕府とも）や後継者が存在しており、一種の保守層が形成されていた。一方の京都では、京都帝国大学や同志社大学、立命館大学などの自由な校風のもとで、今までのような、宮中や武家と全く関係の無かった階級出身の研究者が登場している。これらの若手研究者や若手芸術家達は、退廃しかけていた京都に「モダニズム」という新風を吹き込み、新しい京都を創造していった。

その反面、若手研究者・芸術家などの表現者達に、日本や京都の伝統や文化、風習というテーマを、改めて考察するきっかけを与えた外国人の存在も大きい。例えば、建築学では、滋賀県の近江八幡を中心に活動し、近畿地方に様々な建物を残した、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（一八八〇年～一九六四）（昭和三九）年。アメリカのカンザス州のレブンワース生。建築家。近江兄弟社創立者。伝道師。英語教師として来日。一九四一（昭和一六）年、日本に帰化。日本名、一柳米来留）の存在は大きい。ヴォーリズが設計し建築された建物の大半は文化財に指定されている。また、宗教教育や道徳教育の面での活躍も有名である。終戦直後、国体護持の活動を行っていた事も有名である。また、神道の研究では、リチャード・アーサー・ブラバゾン・ボンソンビー・フェイン（一八七八年～一九三七）（昭和一二）年。イギリスのロンドン生。貴族出身。法学博士。思想家。日本式の名前として、本尊美利茶道と名乗っていた）が挙げられる。神道と皇室の研究家として知られ、普段から着物を着用していた事も有名である。著作には、日本神話や皇室制度、神社研究（由緒、建築様式、年中行事など）に関するもの

が多数ある。

この他にも、芸術面や映画などのあらゆる面に於いて、日本の伝統や文化に關わるモノを意識させた外国人は多く、江馬自身も彼らの表現物である、論文や芸術品(装束類を含む)など目を通しており、外国人研究者を意識した活動をしている。例えば、昭和初期の著作の大半は、英字版を併記し出版している。また、有職故実や風俗史に関する英字版のみの著作を出版しているところなど(和書名『日本の風習と服飾』英字版名『A HISTORICAL SKETCH OF JAPANESE CUSTOMS AND COSTUMES』国際文化振興会 昭和十三年)、日本文化と外国文化の相互作用の活用を念頭に入れたグローバルな活動を行っているところに注目出来る。以上の様に、大正から戦前までの京都を考える上では、これらの点に注目した上で考える必要性がある。

- (33) 江馬務所蔵コレクションが所蔵されている京都府立総合資料館の公式ホームページ (<http://www.pref.kyoto.jp/shiryokan/>) には、このように紹介されている。『江馬コレクション』風俗史家として著名であった江馬務氏が収集した風俗資料(調度品・結髪化粧具・履き物・被り物・玩具・ガラス乾板、写真等)と、染織資料(狩衣・直垂・小袖・帯・袱紗等)、古書籍、氏の著作類などからなる約8,000点の資料です。』

と掲載されている。資料が膨大にあるため、前掲註(一)に挙げた期間での資料収集調査は、『賀茂祭』に限定した資料の閲覧・写真撮影を行った。

- (34) 鈴木鼓村：明治八(一八七五)年～昭和六(一九三二)年。作曲家。日本画家。大正七(一九一八)年頃から那智俊宣とも名乗る。京極流箏曲の創始者。大和絵の画家としても有名。なお、京極流は、国選択無形文化財(記録作成等の措置を講ずべき無形文化財)に登録されている。

- (35) 山上忠磨：明治二九(一八九六)年～昭和四〇(一九六五)年。神職。有職故実家。明治三九(一九〇六)年、皇典講究所卒業。大正元(一九一二年)、賀茂社に奉職。昭和八年賀茂社退職。他に、小野岩戸落葉神社、道風神社、加茂社宮司を奉職。風俗研究会では禮典部長を務め、様々な儀式を上演・再興させた。一部を挙げると、『国栖奏』、『鷹狩』(阪神甲子園球場などで実演)、『水無月祓』、『扇合せ』などがある。また、戦後、昭和三四(一九五九)年に護王神社の「亥子祭」、『亥子餅搗き式』を再興した。

- (36) この後、追儺式は一度中絶するが、昭和四九(一九七四)年に、猪熊兼繁の考証により再興された。

猪熊兼繁：明治三五(一九〇二)年～昭和五四(一九七九)年。法制史学者。有職故実家。京都大学教授を務める。賀茂祭や時代祭の考証を行う。戦後の賀茂祭の女人列再興に尽力。

- (37) また、平安神宮、梨木神社などは明治に入ってから創祀された神社であり、御

祭神に關わる祭礼しかない為、京都市民に受け入れられやすい祭礼を年中行事の中に採り込もうという意識もあったのではないかと考える。また吉田社は、近世期までの様な神道界を代表する神社では無くなっていた。その為、市民の動向を意識した追儺式であった可能性があるのではないかと考える。宮中の行事が神社の祭事を通して、民間主導の行事に変化した例として見てよいのではと考える。

- (38) これに関して、山路興造氏が触れているが、江馬の名前は登場していない。山路興造『京都 芸能と民俗の文化史』(思文閣出版 平成二十一年)六～七頁。

(39) 『江馬務著作集』第八巻の口絵に井筒雅風所蔵の『宮中行事屏風』が掲載されている。各所役の装束の解説は、これに従った。「追儺」に関する絵巻や屏風など現存しているのは多々あるが、江馬は直接、参照にした文献名は挙げていない。ただ、江馬のライバルである吉川観方は、天保一四(一八四三)年に冷泉為恭が描いた『年中行事絵巻』などを参考にして『宮中歳事絵屏風』(福岡市博物館所蔵)を描いている。為恭など有職故実を会得した者達は、古代・中世期の有職故実に関する研究に取り組んでいた。実際、元禄年間以降、所謂、有職四天王と呼ばれる野宮定基、平松時方、滋野井公澄、高橋宗恒(一説では東園基量を指す場合もある)や、関白近衛基熙、前関白一条兼輝らは、本来あるべき宮中祭祀・行事を再興する朝儀再興の為に尽力した。その際に、天皇家や院家、宮家が所蔵していた絵巻などを模写している。また、文字で書かれている情報を基として絵画として継承している。これらの点から、明治以降の有職故実の研究者達は、近世は古代・中世研究の到達点と解釈している為、近世期に描かれた絵巻などを参照しているケースが多い。

- (40) 久保田米僊：嘉永五(一八五二)年～明治三九(一九〇六)年。日本画家。『国民新聞』記者。明治二二(一八八九)年、パリ万博に於いて金賞を受賞。内閣勸業博覧会審査員を務める。

金子錦二：嘉永四(一八五二)年～明治四二(一九〇九)年。狂歌師。『京都市出雲路通次郎』記者。狂歌師としての号は竹廻門静枝と名乗る。

- (41) 出雲路通次郎：明治一一(一八七八)年～昭和一四(一九三九)年。神職。有職故実家。下御霊神社宮司。大正・昭和の大典の考証・指導を行う。京都の各大学にて有職故実を教える。江馬自身も通次郎から有職故実を学んでいる。

- (42) 社頭に於ける神事は、昭和一五(一九四〇)年まで斎行された。

- (43) 藤本恵子「吉川観方と京都文化」(京都文化博物館学芸第一課編『特別展 日本最大級の風俗収集品 吉川観方と京都文化』京都文化博物館 平成一四年) 観方に関する解説は前掲註八を参照。

- (44) 関保之助・猪熊浅麻呂・出雲路通次郎・猪飼嘯谷編『歴代服装図録 染織祭篇』(歴代服装図録刊行会 昭和八年)

- (45) 観方の日記に関しては、藤本恵子氏が、昭和七年・昭和八年・昭和十一年一月

三月・昭和十一年四月～二月分の日記を翻刻している。藤本恵子「翻刻…風俗研究家・吉川観方の日記」(『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第一四集・第一六集・第一八集 京都文化博物館 平成一四年・平成一六年・平成一八年)  
(46) 女性の服飾史や風俗史に関する著作に、『日本の女装』(故実研究会出版部 昭和十一年)、『日本の女装 きもの編』(じゅらく染織資料館 昭和四五年)、『日本女装史』(全日本人形師範会 昭和四三年)などがある。

(47) 江馬務「加茂祭の沿革及其服装」(『有職』第三輯 有職保存会 大正五年)  
(48) 林森太郎・江馬務編『風俗研究会 研究資料 第二輯 賀茂祭解説』風俗研究会 大正六年

(49) 江馬務『日本歳事全史』(白井書房 昭和二四年) 九八頁

(50) 江馬務『京阪神の年中行事』(宝書房 昭和二三年) 八八～八九頁

(51) 江馬務「葵祭」(『K・O・K』五月号 宝書房 昭和二二年)

(52) 江馬務「賀茂祭の研究」(『立命館文學』第二卷第三號 立命館出版部 昭和一〇年)

(53) 江馬務「改訂 賀茂葵祭解説」(山本文華堂 昭和四年) なお、この著作は、風俗研究会編『加茂神社 葵祭解説』(山本文華堂 大正九年)の改訂版である。

(54) 前掲註(1)で挙げた調査で閲覧・撮影した資料は次のとおり。  
『江馬務コレクション』※括弧内の題名は江馬が付けたもの。

・『賀茂臨時祭記』(『賀茂臨時祭御次第』、成立年代不明)

・『元禄七年四月十八日御再興以来 賀茂祭使色目書 宝曆二年迄』(『賀茂祭使色目書』天保七年と江馬先生の字で「注」が書かれている。)

・侍従藤原定功「天保三年 賀茂臨時祭舞人参向別記」(『賀茂臨時祭舞人参向別記』)

・侍従通禮朝臣「嘉永三年十一月廿一日 賀茂臨時祭四舞人参仕記」(『賀茂臨時祭四舞人参仕記』)

・季張「延宝七巳未歳六月八日 賀茂御神服縫裁物覚」(『賀茂御神服縫裁物覚』)

・従四位下季忠「文久三 葵 (虫食いのため判読できず)」(『文久三年葵祭次第』)

・『文政九年 加茂行幸之記』(『加茂行幸』)

・『賀茂祭行列書』江馬家蔵

・『賀茂祭装束色目表』

・江馬務「加茂祭の沿革及其服装」(『有職』第三卷 有職保存会 大正五年)

・江馬務「賀茂祭の研究」(『立命館文學』第二卷 第三號 昭和一〇年)

・江馬務「葵祭」(『K・O・K』キョート・オーサカ・コーベ) 五月号 宝書房 昭和二二年)

・江馬務「葵祭あれこれ」(エリア歳時記) (『京都放送』第八号 京都放送株式

会社 昭和三七年)  
(吉川観方コレクション)

・『文政年間加茂祭』

・『あずまあそび』

・『明治十七年御再興加茂祭召具色目』(『明治十七年賀茂祭記』)

・『賀茂氏足翁二十四番歌結』

・『文久三癸亥年三月吉日 賀茂上下社 行幸御列書』

・『賀茂競馬乗尻装束色目并馬具』

(55) 特に戦後、賀茂祭再興・斎王代と女人列再興に尽力したのは、石川忠であった。江馬は女人列に関して色々と助言をしていた。

石川忠：明治四一(一九〇八)年～平成二一(二〇〇九)年。宮内庁京都事務所所長などを歴任。戦後の京都の祭礼復興に尽力。戦後の賀茂祭継承に尽力。

(56) 前掲註(49) 一〇～一一頁